

「女性はクリスマスケーキ」という表現はいつからか耳にしなくなつた。25歳を過ぎたら売れ残りといわれた時代は終わり、今の日本の女性たちからは結婚適齢期の言葉も消えつつあるように思う。自分でゴールを設定し、強い意志をもって道を切り開いていくこと

週刊 コニヤム

も可能だ。

平成14年に実施された就業構造基本調査によると、管理職総数のうち女性が占める割合が神奈川県では9・94%で全都道府県28位である。働く女性も、子育てに専従している人も幸せを感じているかが大事であり、データばかりを追う必

要はない。しかし、日本の女性は「いまだ使われていない資産」とも言われ、その価値が十分に発揮されていないのも事実のようだ。



世界に目を向けてみると、2006年は女性が活躍した年だった。フランスではセグレーヌ・ロワイヤル元環境相が初の女性大統領候補となった。既に中米にも、アフリカにも女性大統領が誕生し、ドイツにはアンゲラ・メルケル首相がいる。アメリカでは中間選挙の結果、上院議員の女性の割合が100人中過去最高の16人となった。その中の一人、ヒラリー・クリントン上院議員が大統領候補としていかにキャンペーンを展開させていくかにも注目が集まっている。

これまで男性と女性の考

日本の女性



東京純心女子大講師
早大大学院研究員
牧島可憐

え方の違いを脳の仕組みや社会での役割などさまざまな観点から多くの人が研究してきた。アメリカの大学院で受講した「女性とリーダーシップ」という講義では「女性のリーダーシップスタイルには特異性がある」との仮説が提示された。「参加型リーダーシップ」と呼ばれるもので、例えば会議の参加者が議事の進行についてきているかを見ながら各自に発言の機会をつくらうとするのが、女性のリーダーに良く見られるスタイルだという。トッ



プダウンで一人の指導者がすべてを統括してしまうのは「男性的」と表現される。ロワイヤル元環境相の信条「すべての市民が専門家」が広く支持を得たのも、「話を聞く女性リーダー」が求められている証だと思う。

欧米ではよく「あなたロール・モデルは誰ですか」という質問が投げかけられる。模範とする人を聞かれれば、同性を挙げることも多い。日本の女性たちはこの問いへの答えを持っているだろうか。目標とする生き方を模索しているところだろうか。

アメリカの女性上院議員たちのニックネームは自称「スウィート・シックスティーン」。16人はフェミニンさも忘れず、ユーモアのセンスと、ウィットで男性主導の世界に変化をもたらすはずだ。そんな女性が日本にも増えてほしい。